磁器生産の必需品
柞（いす）の木

白川の山中に群生する柞の木

かつて肥前磁器の生産に欠かせないものとして、釉薬に使われていた柞灰がありました。これは柞の木の皮を焼いて作った灰です。柞というのはマンサク科の常緑高木で、このあたりではユス、ユスノキ、ヒョンノキなどと呼ばれている西日本に自生する植物です。「日本陶磁大辞典」によれば、その成分は石灰分が40～50％を占め、ほかの木灰類に比べて鉄分が少なく、その焼成呈色は無色透明に近く、柔らかな光沢があり、呉須の発色がよいとあります。

宮崎県在住の陶芸家山崎忠之さん（伊万里市出身）は、その柞灰のことを長年調査されています。山崎さんは宮崎市で真香窯を開窯し、土と材料にこだわった製作に努めています。そこで、有田には柞の木が自生しているのではないかと考えられ、当館にその調査を依頼されました。有田周辺では、伊万里市の天然記念物に指定されている伊万里市瀬戸町早里の柞の木がよく知られていますが、果して有田の中にあるのだろうかということで調査を行いました。

中村治之有田町水道事業所所長から、以前街路樹を担当していたころ、有田の樹木としてその歴史的な役割を考えると柞の木が最適であるとして、ある時期率先して柞の植栽を行ったことを聞いたことがありました。そこで、中村所長から当館の周辺や泉山体育館の前、赤坂卸団地周辺に植栽した場所を教えていただきました。驚いたことにこの有田にも、白川地区の山中には柞の木が群生している場所があることを教えていただきました。

中村所長の話によれば、柞の木肌はやや赤みがかっていて、ほかの樹木とは簡単に見分けられるということで、確かに自然遊歩道として整備された山道を歩いていくうちに、数多くの柞の木を確認できました。

柞の木を見ていく中で、一体誰がこの樹皮を焼いて釉薬として使うことを思いついたのだろうかと不思議でした。焼き物に関しては柞の木は、樹皮以外を蹴ロクロの芯木としても使っています。おそらく、有田の焼き物の歴史の始まりのころには、この周辺にも多く自生していたと思われますが、いつのころからか、南九州地方の日向や薩摩（現在の宮崎、鹿児島県）にその供給を求めていったものと思われます。

釉薬は泉山や白川の釉薬石などに柞灰を調合して作っていました。その始まりについては現在もよくわかっていませんが、明治20年に著された「制度考」によれば嘉永６年（1853）有田の川原善之助、深川栄左衛門の二人が灰方請元を命じられています。また、そこには「日向飫肥藩の製する所を以て上品とし」「後に同藩の其の供給に応ず可らざるを以て、更に薩摩の製品を約し専ら磁器の釉料となす、肥後球磨製の如きは殊に外陶山の需要に応ずるのみ」とあって、柞灰の中でも質のよしあしが、皿山内の製品に深く関わっていたものと思われます。

さらに明治３年、ドイツ人化学者ワグネルが有田を訪れ、石炭窯や酸化コバルトの使用方法などを指導しました。この柞灰に関しても学理的には同じ成分であれば木灰も石灰も利用できるはずということで、種々のアルカリ類を調合して実験を繰り返しましたが、どうしても思いどおりの結果が得られず、結局柞灰には天然の微妙な性分があって、それが釉薬に作用して美しい光沢を生ずるのだという結論に達したといわれています。

時代が進み、科学も進歩していく中ですべてが解明でき、応用できるのではないということを柞の木は静かに語っているのではないでしょうか。（尾崎葉子）

めも

柞灰については「有田町史陶業編Ⅰ」にその製造方法が説明されています。また、本文中でも紹介した「制度考」にも幕末ごろの柞灰入手についての記載があります。

また、伊万里市史執筆委員長で、現在当館で開催している古文書教室講師の前山博さんが書かれた「肥前陶磁史研究資料・幕末期の肥前有田は薩摩産の柞灰を求めた・柞灰の山里を尋ねて」には、安永年間に宮崎県南郷村付近で柞灰を求めていた、上幸平の窯焼き辻喜平次によって奉納された花瓶の存在が明らかにされています。

季刊
皿山 冬
No. 56
有田町歴史民俗資料館・館報

シリーズ　ザ・陶器市

陶器市物語

その４

～100回の歩み～

陶器市の思い出

いよいよ近まりつつある100回陶器市を前に、今まで陶器市に関わってきた各界の方々に集まっていただき、その思い出を語っていただきました。その座談会の模様を再現してみたいと思います。

平成14年10月22日(火)、有田町歴史民俗資料館に集まっていただいた方は次の通りです。

蒲地昭三　有田商工会議所会頭(商社)、諸隈武　貞山会長(窯主)、篠原恵美子さん(商社夫人)、百田節子さん(役場ＯＢ)

司会　久富桃太郎館長

司　会　今日はお忙しい中をお集まりいただきありがとうございました。お集まりの皆さんに陶器市の思い出を語っていただきたいと思います。第一回の品評会は明治29年に始まりました。当時も今と同様大変な不景気の時で、九代深川栄左衛門さんや田代呈一さんが提唱し、大正４年に深川六助さんが陶器市を提唱しました。これまでの浮き沈み、思い出を語っていただきたいと思いますが、今まで、陶器市を経験されて、悩みとか困ったこととかは。

蒲　地　客を牽引する力というか、うちは赤絵町でやっていたんですが、昔は下ってくるお客さんというのは少ない。やっぱり札の辻あたりまでですよ、香蘭社まで。今右衛門さんでも少なかった。本当に高度経済成長、オリンピックが終わったのが39年ですな、そいで40年の半ばくらいまで今右衛門さんでもそりゃむやみ皿作るごとは売れとらんよ。

諸　隈　あの辺はガタ落ちやったもん。蒲地さんとこあたいはほとんど買い物客はおらんやった。赤絵町、中ん原、岩谷川内はボーンてして、外尾の駅前がチョロチョロっ位。ただ画期的に変わったのはバイパスが開通してからですよ。(48年ですね)

蒲　地　そいで、リゾート地といえば九州では何といっても別府、そいから山口県の湯田温泉。あの辺の旅館組合から有田の陶器市に見える。そしたらもう目立つわけですたい。旅館の女将連中というのはいい衣装を着て、あでやかにして。こんなお客を何とかして(顧客にしたい)、当時は業務用の食器を売るというのは売り上げが上がるわけ。あれは福岡のどこの料理屋の女将さんばい、どけ入っじゃろかって、大体目ぼしいところに入りよったよ。今みたいに、一般がこれだけ、日本が豊かになって所得が増えて、家庭用品へと。まあ百貨店でもそうやったですたい。伊勢丹に有名な山本惣一という専務がおった。彼が所謂オープン食器というのを、例えばブルー格子とか、唐子とか華山の、そういうのをオープンで、お茶碗から何からズッーと並べた。そうしたのが百貨店の神様といわれた山本惣一さん。お茶碗が割れたらお茶碗をまた補充すればいいでしょ、それが馬鹿あたりに当たった。そいで上滝も香蘭社の下請けをやって、デザインも香蘭社の指導で。いうなら業務用は業務用、百貨店は百貨店のというのが出来てきた。陶器市でもそれが浸透してくるというようなことで、香蘭社も、昔の美術品からそういうふうなものにずーっと移行してきましたね。商品の流れがね。

諸　隈　とにかく、48年のバイパスが通るまでと通ってからと、全然動きが変わった。ここ（有田町歴史民俗資料館）も駐車場やった、そいから石場も駐車場やったけん、この道は多かった。うちの前も売れよったし、私のところは黒川床屋の横の川のところに大工さんに頼んであそこに板張りにして、家内と妹とで売りよった。昭和20年の後半じゃなかろうか。

蒲　地　諸隈さんの所は梁山泊というか、優秀な絵描きさんたちがおった。でも。転写が花盛りになり、トンネル窯ができ、ある窯元がトンネル窯をつくってからだもんね、ベタ判で染付からやってさ。あのころから焼き物が変わってきた。赤絵の転写紙が始まったのはいつごろからやろか。

諸　隈　いつごろからやろか。私どんは転写紙というと馬鹿にしとったから、そがんとば、さるっんかって。

篠　原　陶器市が非常に盛んになって有田焼が売れて、数が追いつかなかったかもしれんけど、よそんもんを岩尾泰しゃんという人が仕切って、店ばずっとしんさったでしょうが、戦前はなかった。戦後はそがんしてよその焼き物ば、借りるのを仕切ってしんさったような気がするけど、それがつながってよかったことはよかったけど、値段的にちょっとわかった人はあれですけど、それが陶器市の困ったことというのと、でも流れがつながってたくさん寄せられるというのと。また有田にはできない洋皿なんかが出て、有田の人でも何枚か買っていくというのをしよんさったもんね。

蒲　地　やはり戦後食生活が変わって、アメリカ人が来て、こっちでは深川製磁がやっとられるくらいのことでしょ。そこに入り込んできたのが、うちの前の金ケ江四郎さん、そりゃおっそろしゅう売れよったよ。我々は筋向かいだから。あれもＰＸの関係やもんね。そいから、香蘭社も輸出ということを考えられてね、今の中ん原の前に「さわだ」といって、「陶試紅」というピンク色の香蘭社の焼き物を作られましたよ。

諸　隈　あれも早かったろう、昭和の20年代やろう。

蒲　地　「陶試紅」はあんころ珍しかった。それから深川製磁が佐世保で作られたボーン・チャイナ。あのボーン・チャイナはちょっとクリームがかったような、今も鳴海とか作っておりますが、深川製磁の一番初期のボーン・チャイナというのはなかなか良かった。これも戦後の有田の物作りということで。当時深川製磁には、進さんの妹の米子さんという、あの人が英語ができらすとやろ、それから谷窯の別荘、そういう所に佐世保の司令官とかが来られて、これも有田の陶器市に国際色を添えた思い出でしょうな。

百　田　有田の陶器市にはお食事するところ、食堂がないというので、カレーライスをされたですもんね。

蒲　地　そういう所は深川製磁はハイカラやった。

百　田　困ったことというか、その時々で困ったことを解決するしか方法がなかったわけです。その時一所懸命になって解決していったというふうなことであって、やっぱりゴミの問題とか、その時々でですね。一番始めにきたのは駐車場の問題ですね、少なかったということ、それからトイレ。それぞれ、その時その時で対応していくんですけれど、追っつかなかったというのが一番の困ったことですね。

役場で中心的だった中原（隆）課長さんはですね、部下の育て方が本当に上手かったと思います。アドバイスの仕方、思うようにやってみろという。そういうことを言われたのが一番やりやすかったというのがありますね。それで三越でのをやり始めたのがありますね。（蒲地：陶工会とのね）、そういうふうなことにずっとつながっていったんですね。

司　会　陶器市も来年100回を迎えます。これまでの陶器市の経験でよかったなあとか、嬉しかったこと、喜びはどんなことでしたか。

蒲　地　有田町民と来市者とのスキンシップ、また「今年もおいでんさった」というそういう触れ合いが段々出来てきている。それは私の立場からすれば非常に有り難い。そういう風にして有田人の所謂「客をもてなすおもてな

しの心」が、宣伝するよりも一番だと思うわけ。私は有田の美風が段々重なっていっているのだろうというように感じます。それと、有田のメイン通りの家主さんには、良識ある家賃でもってお貸しいただきたい。

司　会　あと一つ、ちょっと視点が変わりますが、この10年位続いている不景気の時代ですが、有田は不景気のときにいい焼き物が作り出されている、そういう点では今、本当の焼き物を作る時期ではないかなと思うのですが。

諸　隈　それも一つあっですね。わたしら作る者は品物が勝負と。今はあんまり安易に流れ過ぎでしょうが。本物がずっーと薄れて、職人が少のうないよっさい。そいぎ、こいから先、10年先どがんなっかにゃって思う、世話になっとよ。ほんなごて、かきためっすっもんが年とって、卒業していくぎ、後継者はおらんと。勉強するもんな独立してしまうけん。

蒲　地　よーしあれがこうすんないば、おれはこうしてやろうという、よい意味でのライバル心とか、自らを向上させると、そのためにはどうしなくちゃいかんとか、やっぱい勉強せんばいかんとか、有田には先輩が後輩を叱咤激励して教えるという気風があった。今は自分しゃーがよかぎよかという意識。競争心というか、物作りをするためにはもっと美術館でいいものを見る、あるいはなけなしの金で身を削ってでもそれを買って勉強するというのがないね、今の若い連中は。安易にしてというか、諸隈さんがいうように、「かき」とか「だみ」とか、昔のものを見てとか、絵具はどういう風に作っているだろうかとか、釉薬はどうしているのかとかそういう、掘り下げて勉強するということをもっとやらんと他産地に負けてしまう。

司　会　篠原さん、来年の100回陶器市ですが、私は小さいころから篠原さんのお父さん（篠原英男さん）は商売に厳しいなと思って見ておったんですが、どうですか、来年は。

篠　原　まあ、全体に盛り上がるというのは、焼き物屋さんでない人とお茶のみ話でもすると、「うちには親戚も寄るし、焼き物屋さんばっかいお金が入ろうばってん、うちは出るほうばっかい」とか聞いたりすると、そのギャップを、町全体が盛り上がる手だてというか、何か方法がないかなと、ちょっと私たちの頭じゃ考えつかないけど。でも出している人は負担金をこんな出して、陶器市を盛り上げるようにはいろいろ負担してしてるとよ、というと「そりや知らんやった」という話の中で、その人たちも和みはされますけど、盛り上がる手だてというか方法はないか、皆さんに訴えたいですね。

司　会　今日は長時間にわたって陶器市の思い出などお話いただきありがとうございました。町民が「皆んな作ろう有田の躍動！」の気持で第100回陶器市に取組んでいただければと思います。

ペンジャラ

国宝「曜変天目茶碗」（建窯12～13世紀）が公開されると聞いて、10月下旬静嘉堂文庫へ出掛けました。「曜」とは「星」「輝く」の意味があります。姿は端正な天目形で、内面は銀に黒い縁取りを持つ斑点が大小連なって鮮麗な虹彩が滲むように縞状にあらわれています。その斑点の美しさは満天に輝く妖艶な光でした。このほか油滴天目茶碗や青磁の壺など中国の陶磁を見て至福のひとときを過ごしました。

話は変わりますが、間もなく2003年を迎えようとしています。私の素人的観測では、日本経済の本格的な浮揚は規制緩和や税制改革などの構造改革の成果が表れるのが2004年以降ではないかと思っています。即ち、明年も厳しい１年になると考えていた方がよいでしょう。

明年５月、有田陶器市100回を迎えます。先般、当館で「陶器市の思い出」の座談会をしました。今号で要約を紹介しました。全文を別の機会に発表できればと考えています。これまで、有田の歴史を振り返ると、多くの苦難を乗り越えてきました。有田の人々は厳しさを乗り越える凄いパワーを持っております。明年は有田にとって大きな節目の年です。厳しい時だからこそ、「やきもの」の本質を極めるによい機会ではないでしょうか。先述の「曜変天目茶碗」の如く「やきもの」の美しさを極めながら、心を込めた「やきもの」作りを探究する、そういう平成15年でありたいなアと思っています。

（久富桃太郎）

季　刊『皿　山』

通巻56号（平成14年12月1日）
編集・発行　有田町歴史民俗資料館

〒844-0001　佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678　FAX0955-43-4185